

マルチメディア社会を支える先端技術に寄せて

慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科
委員長 相磯秀夫



人類社会は狩猟社会、農業社会、工業社会、そして情報社会へと変革を遂げてきたが、その変革の原動力はいずれも科学技術の発達であったことは多くの人が指摘するところである。今日の情報社会はコンピュータや通信の技術に支えられ、21世紀前半(2030~'40年代)に成熟するものと予想しているが、現在最も注目されている先端情報技術は、インターネットとマルチメディアに関する技術である。

この二つの技術は機能的に相補的な関係にあり、どちらが欠けてもその特長を十分生かすことはできない。そのような意味で、両者は双子の技術であり、お互いに区別する必要はないが、社会的なインパクトという観点からは、当面インターネットの方が影響が大きいとみている。実際にインターネットを活用してどのように現在のビジネスを開拓するか、又はどんなニュービジネスが生まれるかに興味が集中している。一方、マルチメディアは人間の感性又は知的活動を支援する奥行きの深い高度な技術で、21世紀初頭の中核情報技術とみてよい。

いずれにしても、これらの先端情報技術をいかに取り込むかがどの分野においても重要な課題になっているが、社会のあらゆる分野において、限りない変革を与える可能性を持つインターネットの活用に当面は全力投球すべきであろう。マルチメディア技術は黙ってその後からついてくると考えてよい。

それにしても、先端情報技術の開発に関して気になることが一つある。それは、我が国の国際標準化への関心が希

薄なことである。国際標準への準拠は、情報社会の成熟に向けて、ユーザにとっても必ず(須)課題であるが、メーカーにとっては企業の生き残りをかけた最重要課題である。我が国の企業は知的所有権としての特許申請はば抜けて多いが、中核技術を国際標準にする努力に欠け、多くの貢献をしていなかったように思う。現在の情報技術の中核は“Wintel (Windows+Intel)”に席けん(捲)され、我が国的情報技術は空洞化していると心配されているゆえんである。

最近の標準化の課題は開発した技術をいかに“デファクトスタンダード”として国際的に認めてもらうかにあるが、それは国の技術力を示す重要な国家的課題にもなっている。その点で、我が国の先端性を国際的に示した例は、情報の分野ではファクシミリや画像圧縮の技術で、いずれもその成果は高く評価されている。

一般に、標準化作業は多くの時間と労力を必要とし、地味で、辛抱強さが求められるものである。そのために、目前に興味ある話題を持つ研究者にとっては辛い仕事である。しかしながら、製品開発=国際標準である現在の技術開発を考えたとき、研究者にとっても避けて通れない路と考えるべきである。また、国際標準化に取り組む国としてのストラテジーも必要であるように思う。そのような意味でも、“産・官・学”的三者協調体制でこれに当たることも肝要である。